

講義名	企業会計入門/会計学入門			授業形態	
担当教員	米栖 正利/島田 奈美/孫 美英/ 早川 翔	開講期・曜日・時限	後期 木曜日 2時限		
		単位数	2	履修開始年次	1年生

**主題と概要**

本講義は、これから会計学を学ぶ学生はもちろんのこと、それ以外の分野に関心のある学生も対象に、会計分野の中でも専門が異なる複数の教員が会計に関するトピックスを紹介、解説を行う科目です。本講義では、新聞記事などの具体的な事例とそれを理解するための会計学の基本的な理論を組み合わせることで、会計が社会に与える影響や役割を実感するとともに、会計学に対する関心を高めることを目的としています。

**到達目標**

- (1) 会計学とはどのような学問で、その中でもどのような分野が存在するかを理解できる。
- (2) 会計が社会でどのような役割を担っているのが理解できる。

**提出課題**

担当教員によって実施方法が異なるため、各担当教員の指示に従って下さい。

**課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法**

教員により課題を出すタイミング、フィードバックの方法が異なりますので、各担当教員の初回の講義にはなるべく出席し、指示に従ってください。

**評価の基準**

- ・4人の担当教員がそれぞれ25点満点で評価します（2.5点×4人＝100点）。
- ・評価の方法は各担当教員により異なりますが、課題提出または小テストが課せられます。それぞれの実施方法等は各担当教員が講義時間または掲示資料等によって告知します。

**履修にあたっての注意・助言他**

- ・欠席届は、欠席した回の担当教員に直接渡してください。異なる教員に渡した場合には無効になる可能性があります。
- ・本講義は原則対面ですが、新型コロナウイルス感染症に罹患または濃厚接触者に認定された学生に対しては、大学の方針に従い対応します。

**教科書**

.使用しない。

**参考図書**


**その他**

講義時間中に配布するか、またはPortalに一定期間掲示します。

**授業計画**

1. 本講義の位置づけ
2. 会計コース開講科目との関連
3. 会計学とは
4. 会計の役割
5. 会計の基礎的前提
6. 会計基準とその国際化
7. 貸借対照表と損益計算書
8. 貸借対照表と損益計算書
9. その他の財務諸表
10. まとめ（第6回～第9回）
11. 管理会計と原価計算
12. 管理会計と業績評価制度
13. CVP分析
14. 単純総合原価計算
15. 全体のまとめ

複数クラスを開講しますので、シラバスの順番が前後する可能性があります。

**授業形態（アクティブ・ラーニング）**

<input type="radio"/> A: PBL (課題解決型学習)	<input type="checkbox"/> I: 反転授業 (知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態)
<input type="checkbox"/> W: ディスカッション、ディベート	<input type="checkbox"/> E: グループワーク
<input type="checkbox"/> O: プレゼンテーション	<input type="checkbox"/> C: 実習、フィールドワーク
<input type="checkbox"/> K: その他 (A・L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合)	

**準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間**

各担当教員の指示に従い予習・復習を行ってください。  
一つの例としては、各自に指定するテキストの範囲を熟読し、要点をまとめておくこと、講義で理解できなかった部分を自分で文献調査などがあげられます（4時間程度）。

**卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連**

目標(1)から(2)を達成することで、本学の全学共通科目DP「流通科学大学の学生が卒業時に共通して身につけておくべき資質・能力」のうち、「知識を知恵に転換することができる、論理的思考力を持った人材」に貢献できます。

簿記、会計の学問的知識を身に付け、企業の財政状態、経営成績、キャッシュフロー等に関する情報を作成、分析することができます。ただし、これらの具体的な事項というよりはこれらの意味や考え方を主軸とした企業の経営活動を会計学という学問がどのように考えているのかといった観点を知ることができます。

企業の社会的役割を理解したうえで、得た専門知識をもとに企業が直面する問題や企業の強みを見出し、経営戦略の構築に貢献することができます。これらの「事項」を会計が数値の増減に注目して理解しようとするので、その増減がどのように思考を拡げていけばいいのかという問いに対する「解答」を得るために、何を考えるべきかにつづく可能性を高めることができます。

**双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述**

基本事項を講義することが主目的のため、双方向講義という運営をとりません。もちろん、派生する項目や質問に対して補足説明を行う時間を設け履修者の理解を助けます。

**実務経験の有無及び活用**


**備考**
